

2021年4月11日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「神の国の秘密の『種』」マタイ5章3～10節

主任牧師 加藤 誠

「心の貧しい人たちは、幸いである。天の国はその人たちのものである」(マタイ福音書5章3節)。

学校も会社も教会も、新しい年度を迎えました。新しい学校や職場、新しい環境で、新しいスタートを切る人たちがいます。コロナで先行きの見えない始まりですが、私たちは今年も主イエスのイースターの喜びをいただきましたから、一人ひとりの歩みが主イエスの希望の光に照らされて守られるように祈りたいと思います。

さて主イエスの十字架の場面を読み直していて、主イエスが人々に捕まってから十字架の上で処刑されるまでというのは、時間的にはほんの12時間ほどのことだったことを改めて示され、愕然とします。たった半日の間に、逮捕され、裁判の判決が出て、処刑です。まともな裁判が行われたわけがありません。権力者たちの明らかなきがらが見えます。事の次第が一般の市民たちに知られないように、弟子たちが騒ぎ出す前に、そしてイエスという男に奇跡的な力を発揮させるチャンスをいっさい封じる形で、すべてを秘密裏にさっさと片を付けてしまおう。朝日が昇って人々が目を覚ます前に、すべて決着をつけてしまう。そういう綿密な打ち合わせ通りに、すべてが持ち運ばれたのです。最高法院でのでっちあげの証言を用意し、判決もあらかじめ用意し、そしてローマ総督ピラトの屋敷の周りには人々を動員して「死刑にせよ」と大声で叫ばせて。

人間の歴史においては昔も今も、権力者が司法と軍隊を手中にしているところでは、「邪魔者」「危険人物」と見なされた人たちはこのように悲しくらいにあっさり消されてしまいます。今、ミャンマーでは国軍による犠牲者が出ているのに、国軍はデモ隊と学生との間にトラブルが起こって死者が出ているのだと説明しています。市民たちはスマホで撮影した映像などで国軍の過ちを隠蔽させまいと抵抗していますが、国軍は一切罪を認めようとしません。残念ながら、「地の上」では、銃と金を持つ者たちが強い。これが私たちの現実です。

主イエスの弟子たちの信仰は、この「地の上」の現実にもごとくに木っ端みじんにされてしまいました。ゲッセマネの園に祭司長や長老たちが送り込んだ群衆が剣やこん棒を手に押しかけた時、ほぼ丸腰の弟子たちは抵抗するすべを知りませんでした。「あれよあれよ」という間に主イエスは連れ去られ、十字架の上の釘付けにされてしまいました。

主イエスの弟子たちは、あのイスカリオテのユダを除いてみんな北部のガリラヤの地方出身者たちでしたから、エルサレムの都の地理にはみんな不案内です。主イエスがいったいどこに連れ去られたのかも想像もつかない。かろうじてペトロだけが主イエスの後をつけていくわけですが、残りの弟子たちは、あの最後の晩餐をした家の二階以外に行く当てがなく、その部屋に戻るほかありませんでした。そのう

ちにペトロも彼らの部屋に帰ってくるわけですが、しかし彼はひと言もしゃべれる状態ではなかっただろうと想像します。主イエスのあとに付いて行ったものの、「イエスなど知らない」と三度も否認してしまったのですから。リーダーとしての彼のプライドは粉々に砕かれ、他の弟子たちに顔向けできずに、部屋の隅にうずくまり、頭を掻きむしり、悶えているペトロの姿が浮かんでくるようです。

それでもその部屋の中で弟子たちは「ほんとうにこのまま部屋の中に居て良いのだろうか」と悩み、葛藤したのではないのでしょうか。「今からでもイエスさまのところへ駆けつけよう。俺たちはイエスさまに愛してもらった弟子じゃないか。このとき踏ん張らないでいつ踏ん張るんだ！」と。何度立ち上がり、部屋の扉を開けようと手を伸ばしたことでしょうか。しかしその最後の一押しができずに、結局は部屋から出られずにいた情けない弟子たちでありました。

しかし、このとき、すっかり信仰を砕かれ、うずくまるほかない、彼ら弟子たちの心に、神の国の秘密の「種」が主イエスによって確かに蒔かれていたことを思うのです。主イエスの十字架と復活の出来事を受けて、あらためてマタイ福音書を最初から読み直す時、主イエスは、まるで粉々に砕かれた弟子たちの姿をあらかじめご存知であるかのように、御言葉を語ってくださっていることに気づきます。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った」（マタイ13：3）とあるように、私たちの間に、神の国の実りを期待し信じて、今日も「種」を蒔き続けてくださっている主イエスの姿が見えてきます。

例えば、山上の説教の冒頭「幸いなるかな」というメッセージです。「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」。「心の貧しい」とは心の中に何も頼るものがない、小さく貧しくされた状態を言います。まさに十字架の出来事の前に粉々に砕かれた弟子たちです。でも、主イエスは言われるのです。「天の国はあなたがたのものだ」と。「十字架の苦難をすべて引き受け、復活したわたしがあなたがたと共にいる。だから大丈夫。神の国の恵みの光の中を歩んでいきなさい！」と呼びかけておられるのです。

主イエスがその身をもって私たちに伝えてくださった「神の国の喜びと希望」。それはなかなか見えにくい秘密の「種」のように、私たちの心に蒔かれています。その「種」は、ほんとうに必要な時に、神さまの手によって必ず芽を出し、私たちに「神の国の喜びと希望」を見せてくれるのです。

弟子たちも「地の上」の現実の厳しさの前に小さく小さく砕かれました。けれども、その小さな彼らが「御心の天になるごとく、地の上になりますように」と主イエスを通して祈る時、「神さまのおられる天と、私たちが生きる地は確かにつなげられる！」のです。神さまの愛が、人の目にはなかなか見えにくいとしても、神さまの正しさと愛がこの「地の上」に実現していくのです。

この確かな希望を届けてくださった復活の主イエスの光に照らされながら、共に歩んでいきましょう。